



校長会



No.50

三重県小中学校長会 広報 第50号

●発行●三重県小中学校長会 津市桜橋 2-142 三重県教育文化会館内 TEL 059-227-7011 E-mail info@mie-kochokai.com
●編集●三重県小中学校長会 広報委員会 ●印刷●光出版印刷株式会社 松阪市久保町 1885-1 TEL 0598-29-1234



今、目の前にいる子どもたちはどんな社会を生きていくのだろう。情報化社会の中で、不確かな情報に惑わされないで真実を見つめていけるだろうか。また多くの人と力を合わせて、人権文化あふれる社会を築いていけるだろうか。予測不可能な時代に生きる子どもたちに、中学校の三年間でできるだけのことをしたい。そんな思いで取り組んでいることの一部を紹介します。

思いにふれ、語り始める子ども。そんななかまの姿に触発されるように思いを重ねていく子どもたち。三年生のクラスミーティングにつながる取組です。

三つめは、将来の自分の姿から逆算して今を生きることです。目標を持って今を頑張る。勉強はもちろんのこと、「柘植中スタンダード」と呼んでいるスローガンで、①挨拶をする、②人権問題を自分ごととして考える、③自分の意見をしっかりと伝えることを生徒会活動でも意識しています。

その中で大事なことは、小中連携です。中学校の教育は、小学校六年間の積み上げの上にある。子どもの情報を共有し、小学校とともに九年間のスパンで子どもの成長を見ていくことを大事にしています。

その一つは、小学校の生活綴り方を中学校でも継続することです。思春期真っ只中の中学生にとって、生活を綴ることはそれ自体が難しいこと。それでも暮らしを綴ることによって、学校での姿や表面的な見方だけでは分からない暮らしの現実が見えてくる。それが交流され共感が生まれたとき、本当の意味で子どもたちはつながっていくのだと考えています。

私の学校づくり

エンパワメントを引き出す



伊賀市立柘植中学校

校長 増岡 一成

今日的課題の克服に向けて

教育的に不利な環境のもとにある子どもたちが学ぼうとする学校をめざして

鈴鹿市立栄小学校

校長 原 裕



子どもたちの置かれている状況から

不登校やいじめ、虐待やDV、日本語の不習得、また、家庭の環境や経済状況により、健康に育つための環境が整いにくい子どもたちがいます。このような教育的に不利な環境のもとにある子どもは、学力の不振、自尊心の低下、問題行動等の課題が明らかになっていたり、そのような状況になる可能性を抱えていたりします。**組織的なバックアップ体制を旨として** 様々な課題を抱えた子どもたち一人ひとりに応じた指導・支援を進めていくためには、関係機関と

の連携や組織的な取組が不可欠です。

本校では本年度から、スクールライフサポーターが一人配置され、月十日程度、不登校傾向の児童や家庭支援の必要な児童の家庭を訪問し、登校を促したり、登校後の教室の見守りをしたりしています。また、SCとの相談体制や、SSWとのケース会議等を進め、福祉や医療関係、児童相談所等との連携を強化しています。

相談に係る児童や保護者にとつては、学校や関係機関等には拒絶感が強いことも少なくありません。そのため校長は、常に保護者との意思疎通を図りながら、信頼関係を基礎として、各関係機関の高いスキルを活かした協働体制を構築していくことが求められています。

学校運営協議会の活性化を旨として 様々な課題を抱えた子どもたちにとつて、学校運営協議会が果たす役割は、本校にとつて重要です。委員の一人である校医には、スマートフォンに関わる実態調査を

進めていただきました。校区中学生のアンケートの結果から、スマホを持つている三年生の約六割近くがスマホに依存している課題が明らかになりました。また、その内の約半数の生徒が「視力が落ちた、就寝時間が遅くなった、勉強時間が減った」という困り感も持つていることがわかりました。この結果をもとに、児童生徒に向けて出前授業を行っていただいたり、保護者の教育上の相談等にも応じていただいたりしています。

このように地域や専門家の視点から、児童や保護者に対しての支援・助言を受けることは、速やかな課題の解決や子どもたちの健全な育成につながっています。

自尊心の向上を旨として

児童においては「自分に良いところがある」と思う児童の割合が少なく、自尊心を高めていくことが必須であると考えています。そのためには、子どもたちの置かれている状況を全職員が共有し、教育的に不利な環境のもとにある子どもを中心に据えた仲間づくりの取組を進めていくことが重要です。

昨年度、吃音のある児童がサマーカーンプに参加したことをきっかけに、吃音について自ら調

べた自由研究をクラスで発表するという取組がありました。吃音について、自分のことをクラスの仲間知って欲しいという児童の思いを知ったクラスの仲間が、今までの自分自身の関わりを振り返る内容を返していく内容でした。「自分分は自分のままでいいんだ」という相互のメッセージは、自尊心を高める授業の今後の方向性を見出せたと感じています。

子どもの現状と課題を把握し、そこから取組を作っていくには、教員の授業力向上が重要です。平素は校長として、「わかる授業」を目指した授業力アップの観点（教材研究、板書、導入、めあて、発問、学習形態、視覚支援、振り返り、視点児童、校内共通取組）に沿って、具体的助言をメッセージにし、授業者に直接届けるように心がけています。

少人数のメリットを活かす

津市立美杉小学校

校長 藤並みどり



一 本校の概要

本校のある美杉町は津市の南西部に位置し、豊かで美しい自然に囲まれ、美杉茶の産地であり、清流雲出川のアマゴや海を渡る蝶アサギマダラの飛来地としても有名である。本校は、何回かの統合を繰り返して、現在は美杉町で唯一の小学校となった。児童数は年々減少の一途をたどり、今年度は五十七名である。校区を一周すると七十キロメートルほどある。広大な美杉町すべてが校区のため、五十五名の児童がスクールバスで通学している。津市小規模特認校制度により、美杉地域以外の津市内から通っている児童も数名いる。

二 児童の様子

本校の児童は、少人数であるが故の表現力の弱さや自信のなさ、人間関係の固定化といったデメリットが見られる。

保護者や地域の人々のふるさと美杉への思いや関心は高く、「子どもは地域の宝」の考えのもと、さまざまな教育活動に対して協力的である。そこで、子どもたちが地域を誇りに感じられる学習と児童が自分に自信を持てる学習に取り組んでいる。

三 地域のよさを実感する学習

人との出会いを大切に、関わってくださる方々のふるさと美杉を大切にしてみえる気持ちや仕事へのこだわりがふれることで、自分自身について考える学習とすることを確認して地域学習に取り組んでいる。大洞山での自然体験では、「すべての木がいつも緑色だと互いに水の取り合いをしまう。紅葉して葉を落とすことで自分の分の水をほかの木に譲っているのだよ。みんなはどうかな。」と、大切なことを教えていただき活動が始まる。マコモダケの生産では、地域の名産にしていきたいといういろいろな方面に働きかけて活動されているエネルギーにふれながら学習活動を進める。米作りでは、自分たちが蒔いた籾から育った苗を愛おしそうに触りながら田植えをする子どもたちに、美杉の米の素晴らしさを熱く語っていた。この他にも地域に支えられてたくさんの方々の地域学習に取り組んでいる。「Aさんみたいに優しい人になりたい」「BさんとCさんみたいに強くなりたい」と関係をつくりたい」と生き方学習へとつながっている。

四 自信を持って表現できる学習

児童がコミュニケーション力を高め、自分に自信を持って人とながっていく力を伸ばしていくために、外国語を中心にした研修に取り組んでいる。高学年で七十時間の外国語科を、中学年で三十五時間、低学年で月一回の外国語活動を実施している。本校独自の英検に一年生から取り組むことで自分の目標を明確にして楽しんで学習に取り組めるように工夫している。

学習の確かめの場としての英語による児童集会では、児童の生き生きとした姿や自分の力でやり切ろうと踏ん張る姿が見られる。全校児童や参観いただく保護者の前で自己表現できたことの満足感や喜びから、自分に自信を持つことができている。

五 少人数のメリット

これらの取組では、少人数であるからこそ、児童にとつて自己表現ができる時間と場が多くある、児童同士の学び合いが行いやすいというメリットがある。児童を鍛えていくため、これからもデメリットよりもメリットに目を向けて児童の育成を目指していきたい。

「知らなかった」では

大台町立大台中学校
校長 藤原 一成



安心安全な学校が叫ばれる今、糖尿病と言えば、「I型糖尿病」と「II型糖尿病」があるのはご存じでしょう。今では学校でも、職員がインスリン注射について研修することもあってはいないでしょうか。

二十数年前、当時勤めていた学校で、保護者から「I型糖尿病」の学習会に誘われました。糖尿病と言えば、全て一緒だと思っていた私にとつては、その違いなど初めて知ることばかりでした。その時に当事者の方が、「私たちは、私たちの病気のことを知ろうとしてくれる人がいることが嬉しいのです。」と言われました。

昨年、LGBT・性の多様性を山口颯一さんに学びました。山口さんは、女性としての性に違和感を覚えて男性として生き、カミングアウトされています。そこで言われたのが、「この問題について、

関心を持ってください」として「知ろうとしてください」ということでした。

また、今年は、シンガーソングライターとして活躍され、今は難病の膠原病と付き合ひながら活動されている南修治さんに来ていただきました。子どもたちも、南さんの生き方に共感し、いい出会いができました。そこで、膠原病と付き合ひながら南さんも使ってみえる「ヘルプカード」を紹介してもらいました。ヘルプカードは、援助や配慮を必要としている障がいのある方や、病気の人が日常生活や災害時などで困ったときに周囲に示し、支援や理解を求めやすくするカードです。市町の役場などにもあるのですが、まだまだ認知されていません。

それを知っていれば、見ただけではわからない病気や障がいがある方たちに、もっと関わられたでしょう。

そして、最近、教子子から相談された「部落問題」。

再婚で同和地区に行く。周りの私たちはそのことを知っているが、パートナーになる人は知っているのだろうか。子どもたちには、話すべきか話さないでおくべきか。うわさは色々入ってくるが、

今さらながら部落問題について知らないことが多い。などなど不安だらけだ。

いいアドバイスができたかどうかはわかりませんが、ご両親も理解をし、子どもたちにも話をして結婚されました。いい笑顔の写真が送られてきました。

後日、パートナーとも正面から話をされたようです。パートナーは、やっぱり自分の出身のことをわかっていて、自分が切り出せなかったことを切り出してもらえて、安心したようです。「話して以前よりさらに仲良くなれた気がします。」と結ばれてました。

これまで取り上げたことも部落問題も、どこかの問題ではなく、過去の問題でもなく、今ある私たちの問題なのです。子どもたちの安心安全を最優先に考える私たちがだからこそ、「知らなかった」では済まされないのだと、あらためて感じています。



第69回全連小北海道大会報告

校長のリーダーシップ

伊勢市立明倫小学校
校長 加藤 眞弓



甚大な被害をもたらした北海道地震から二ヶ月、函館大会はその爪痕に負けない教職員の団結力とエネルギーが溢れる素晴らしい大会だった。

二日間の研修を「校長の役割と指導性」の観点から振り返ってみる。

第六分科会「健やかな体」に参加した。地元北海道からはスポーツ活動を通しての取組、青森県からは食育を通しての取組が提案された。提案に絡めて各校の取組を紹介する中で、多くの学校が保護者・地域・専門機関と連携した組織をつくって取組を進めていることが分かった。ここでの校長の役割は、取組の方向性や組織の果たす役割を明示し、組織を実働させていくことであるが、校長のビジョンが明確でなかったり、指導性が弱かったりすると、せっかくの組織も有名無実になってしまい、取組の成果につながっていかないことが明らかになった。また、取組を進める主体である教職員を育成し、やりがいをもって任務にあたらせることも校長の手腕にかかるということを確認した。自身自身の学校経営を振り返りながら、反省させられたことや新たな視点を学んだことがあり、実り多い分科会となった。

全体会ではテーマに関連し、文部科学省からの講話があった。「小学校の六年間は社会や自然、人と関わっていきける人格をつくる大切な六年間」という言葉を重く受け止めた。新学習指導要領にはプログラミングや外国語、デジタル教材など、やがて訪れる超スマート社会に対応した学習内容が盛り込まれている。当然のことであるが、それに伴って教職員の研修や学習環境の整備も必要になってくる。しかし一方では、学校における働き方改革の推進も重要施策の一つとされている。校長はリーダーシップを発揮し、何に重点を置いて、どんな教育活動をしていくのか、

か、ビジョンを明示すると同時に、働きやすい職場環境を整えなければならぬ。自分にそれができているだろうか。自校の教育内容や業務を振り返りながら、斬新な改革の必要性を感じると共に、校長としての責任の重さを実感させられた。



全連小北海道大会 第八分科会に参加して

四日市市立羽津北小学校
校長 野口 裕



一日目の午後、第八分科会「リーダー育成」に参加した。研究課題

を「これからの学校運営を担うリーダーの育成と校長の在り方」とし、二本の研究発表と小グループの話し合いを行った。

一本目の三重県の松阪市立彌見小学校の研究発表は、「学校規模における、ミドルリーダーの育成」というテーマで発表があった。市内には全校児童三千四百人の小規模校から全校児童八百十五人の大規模校があり、ミドルの年齢に当たる教職員がいない学校があると報告があった。これは全国の多くの学校の現状でもある。報告では、ミドルリーダーを年齢には関係なく「自らの取り組みや実践を通して、周りを巻き込んで学校の教育目標の達成に進むことができる教職員」と定義し、学校規模に応じ、校長間で情報交換しながら、ミドルリーダーの育成を図っていると

いうことであった。成果として、組織の活性化・効率化が図れたことや若手育成や授業力向上にも繋がったことなど報告されたが、ミドルリーダーが職務に一生懸命取り組むための時間確保が難しい現状やリーダー育成のための研修に参加できないことなど課題もいくつか明らかになることができた。

二本目の北海道の知内町立湧元小学校の研究発表は、「キャリアアップ及び組織的な管理職人材育成の推進」というテーマで発表が

あった。優秀な管理職人材は、短期に育成できるものではなく、若年層からそれぞれのキャリアアップに際した力を意図的・計画的に身に付けさせ、ミドルリーダーとしての経験を積ませることが必要であると報告があった。キャリアアップステージをルーキー期・ホープ期・ミドル期・ベテラン期に分け、それぞれのキャリアアップステージで身に付けるべき力を明確にして取組を進めていた。各市町校長会も管理職育成のための研修会を主催し複数の校長による客観的・多面的な指導助言が有効であると報告があった。

最後のまとめでは、管理職人材を育成するためにも、現在の管理職が「笑顔」で日々勤務し、管理職の魅力を示すことが大切であると参加者全員で確認できた。



第69回全日中鳥取大会報告

全日中鳥取大会 (全体会)

鳥羽市立長岡中学校
校長 濱地 圭司



隣の出雲大社では八百万の神様が全国大会を開いている神在月の十月二十五、二十六日、鳥取県米子市においても約二千人の中学校長が全国から集まり、第六十九回全日中鳥取大会が鳥取(米子)大会が行われました。

開会式後の文部科学省説明では、第3期教育振興基本計画をもとに、「働き方改革」「子どもの貧困問題」「性同一性障害や性的指向・性自認への対応」など今日的な課題を含め、今後学校教育が取り組むべき十六事項の説明がありました。その中で「Society5.0における学びの在り方」については学校が日進月歩で進む社会に適応し、的確な判断ができる子どもたちを育てる教育を進めていかなければならないことを強く感じました。

全体協議会では、第1提案で全日中生徒指導部長より「特別支援教育推進」に関する調査報告、課題と改善への方向性が提案され、

第2提案では、小学校6校1分校と中学校が統合した小中一貫校である大分県の蒲江翔南学園の「蒲江とともに歩む学園づくりを目指して」という取り組みが紹介され、新しい学校の形へのシステム作り、その成果や課題が提案されました。

勇壮な大山僧兵太鼓の響きに続く全体会の大会宣言では「拓こう！ 未来の教育を 童謡のふるさと 鳥取から」のスローガンのもと、6つの決議案が出され、満場一致で決議・採択されました。

記念講演はモンベル会長の辰野勇さんに「夢と冒険〜今リーダーに求められる力〜」という演題で、小学校の頃、体が弱く学校登山に参加ができなかったコンプレックスをばねに、登山への思い、高校の時に抱いたアイガー北壁登頂への夢、それらを叶えるための努力、会社設立への思いや今後の取組などを語っていただきました。その中で、何かを成し遂げるためには「集中力」「持続力」「判断力」の3つの力があればできるが、リー

ダーにはもうひとつ「決断力」が必要であるという言葉が耳に残りました。他県の校長、地元の人たちとの一期一会、スムーズな大会運営など本当に有意義な大会でした。



やれリーダーシップだとか、マネジメントだとか、校長の職能に關して、横文字で語られることはいかに多いことか。あなたは何をもって校長の職能と考えるだろうか？

今回、鳥取で行われた全日中研究協議会に参加して感じるが多かったのでお伝えします。第四分科会は、北海道西部の半島にある松山地区と函館市、どちらも人口減少に悩む二つの中学校長会からの発表がありました。印象に残った実践、その一は、松山地区のB中元気アッププラン。日常の時間を利用した取組として、空間、時間、仲間の三つの間を利用して体力向上を図るというもの

です。各階のホールに垂直飛びなどの測定器具を常設し、休憩時間を利用して、気軽に友だちと励まし合って体力テストに挑戦し、記録していく取組です。その二は、函館市の中学校からは、市で行っている地域人材を活用したアウトリーチ事業を利用して、ジャズダンスの授業が紹介されました。講師にダンススクールの代表を招いて、流行のダンスでリズムに乗りながら柔軟からヒップホップダンスへと生徒は休む間もなく、興味を持ちながら身体を動かすという取組です。手軽に取り組めるものや生徒の興味・関心を高めるもの

が、生涯のスポーツ習慣につながるかもしれないと思いました。学校という視点で見ると、知体のバランスの取れた教育活動が必要で、その中で体力の向上や生涯スポーツの意識をどう育てていくかが課題です。個人的には、あらゆる教育的活動に取り組む姿勢や意識を高める意味でメンタルトレーニングはいいと思います。

学校において最前線で生徒や保護者に向き合っているのは現場の教師です。今回の提案や討議を通して強く感じたことは、職場の活気ある雰囲気を作るための校長の役割は、自分の学校経営に明確な軸を持ち、仕掛けをするということです。大きな成果を意識してできない理由を探すより、今できる小さな一歩を踏み出すことが大切だと感じました。

第四分科会「体力の向上と生涯にわたって運動に親しむ資質・能力を育てる教育の充実」

松阪市立東部中学校
校長 野呂 一彦



やれリーダーシップだとか、マネジメントだとか、校長の職能に關して、横文字で語られることはいかに多いことか。あなたは何をもって校長の職能と考えるだろうか？



特別寄稿

三重のよさを大切にしよう

三重県退職校長会

会長 川合俊平



鈴木前会長の後を受け会長に就任しました。併せて東海北陸協議会長・全連退副会長というおまけつきで戸惑っています。でも、近県の様子や全国の様子がよくわかり、社会の変化や教育界の動きもよく見えるようになったのはありがたいことです。今、教育界も大きな変革の波に翻弄されています。

最前線、現場の校長のご苦労に思いをいたしております。まだ就任半年ですが、思うことがいくつもあります。

わが三重のよさに気づく

退職校長会は全国組織で、全国連合退職校長会として連帯して活動していますが、会員の減少に悩

んでいます。三重は新規加入率が90%あります。これは現職校長の皆様のご理解ご支援の賜ですが、全国的情勢を知ると吃驚します。30%に満たない県もあるからです。加入しない理由は①「メリット」がない。②退職してからも「関わりたくない」が上位だそうです。いつの間に、子どもと向き合うことの事にメリットがあるとかないとかというように考えるようになったのでしょうか？ また、「関わりたくない」というのも余りにも淋しい話ではないでしょうか。教育は、協働が極意

い教員を育て、苦境を乗り切る一番の近道だと思えます。競争より大事なものを、学力テストが本来の目的を外れて学校や地域や教師の評価に使われてしまうという傾向ひとつ見ても、評価と分断が今の社会を息苦しくしている元だと思います。パワハラが次々と問題になっていますが、共に悩み、共に汗をかき、共に高まろうとする姿に、教育の成果はついてくるものだと思います。われわれ退職校長にもその御興をちよつと一緒に担がせてくれませんか？ それを私たちは願っているのです。

退職校長の思い

私たちは、教育界に永くお世話になった者として、教育界とりわけ学校現場や子どもたちの活動を側面から応援したいと願っています。その一環として、

- ・「教育の日」制定への取り組み
- ・学校や子ども、地域等への支援活動
- ・国、県市などへの陳情活動

などを標榜していますが、成果を上げるには至っていません。どうか気軽に声をかけていただき、私たちにできることで私たちの経験や力を活用してほしいと呼びかける次第です。

ちよつと いい話 修学旅行でのわたくま

紀宝町立成川小学校 校長 岩本直樹



二学期早々に奈良・大阪方面への修学旅行を実施しました。校長として初めての引率です。何事もなく無事に帰ってきて当たり前に出発前から不安と期待が交錯し、緊張感とともに身の引き締まる思いでした。

家から離れて、仲間と寝食を共にし、学習活動を行います。この八名の六年生は、どんな姿を見せてくれるだろう、どんな学びをしてくれるのだろうと期待が高まります。「仲間と協力し、つながりを深めよう・自分で考えて気持ちよく行動をしよう・よく見よう、よく聞こう！」これは、みんなで立てた目標です。

当日の朝は大雨でしたが、奈良に着く頃には止んでいました。幸先の良いスタートです。東大寺をめぐり、「人と防災未来センター」へ。ここでは、阪神淡路大震災で

起こったことを伝え、災害に強い町づくりや自身の準備に役立つ情報を発信しています。大迫力です実にせまる映像やジオラマ、心に迫るドキュメンタリーに、子ども達は大きな刺激を受けたようでした。ナイター観戦が気になって、さつと見て終わる子もいるかもしれないとの予想に反して、予定時間を越えても八名みんなで見たり触れたりしながら、熱心に学んでいました。そんな子ども達の様子が嬉しく、ひとしきり感心していました。やがて宿に到着し、夕食の時でした。

食事のお世話をしてくれていた女性の方と、初めは甲子園やタイガースの話をしていた子ども達でしたが、ふと誰かが「おばさんは、阪神大震災に遭ったんですか。」と尋ねたのをきっかけに、「どこで」「何歳でしたか」「どうなりましたか」など、体験者であるその女性から、少しでも話を聞き取ろうとする子ども達の姿がありました。

「普段は、引つ込み思案の子が多くて、知らない人に質問して話を聞くなんで苦手なんです。それも今学習してきた、阪神大震災のことを聞いているなんて。」「このことだけでも、修学旅行の成果がありました。」と一緒にその様子を見ていた担任の、その言葉もうれしく感じました。

「教師の一言」

鈴鹿市立白鳥中学校
校長 宮村 喜代美



九月の三連休の最終日に、私が新採の年にフリーで所属した二年生の学年の同窓会があった。私はサブライズということで招かれ、三十五年ぶりで五十歳の教え子達に再会した。

担任でもなく、この一年間しか担当しなかった学年だったため、卒業アルバムもなく、顔は思い出せても名前はほとんど思い出せなかった。隣に座っていた教え子に話しかけると、「先生の家は久居やったな。」という言葉が返ってきた。彼にとってはどうでもいいようなことだと思ふのに、よくまあ覚えていてくれたものだと思ふようになった。そう思った時に、ふと卒業してから何年も経って手紙をくれた教え子のことを思い出した。彼女は、いつも話の中心に居るようなにぎやかな生徒ではなかったが、しっかりと自分の考えを持っており、私は、周囲にむやみに

同調しない彼女らしさが興味深く好きだった。その彼女がある時、仲のよい友達を見て、「あの子は面白くていつも人を笑わせているけど自分はそんな風にはできない。」と言った。彼女がそんなことを思っていたことに驚いた私は咄嗟に、「あの子は面白い (funny) かもしれないけど、私から見たら、あなたも面白い (interesting) よ。」と思いついたままを言ったが、英語の教師でもなく、今思えば訳の分からないことをよく言ったものだと思ふ。恥ずかしい限りだが、その時は本当に思ったことを言ったままであった。

それきり、そんな会話がなかったことをずっと忘れていたが、卒業してから何年も経ったある日、彼女から手紙が届いた。中には「あの時の先生が言ってくれた、funnyじゃなくてinterestingという言葉が、自分の自信になりました。」と書いてあった。何があつて何年か経ってから手紙をくれたのかは分からないが、何気ない一言をずっと覚えてくれていて、手紙をくれたことにこちらこそ感謝したいと思つたものだ。逆に、何気ない一言で、傷つけたこともあつたかもしれない不安にもなつたが、教師の一言の重みを感じた出来事である。

第53回東海・北陸地区連合小学校校長会教育研究三重大会

平成30年10月18日(木)〜19日(金)

第五十三回東海・北陸地区連合小学校校長会教育研究三重大会が、津市で開催された。大会主題「新たな知を拓き人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」副主題「夢の実現に向けて主体的・協働的に学び、共に未来を切り拓こうとする子どもを育む学校経営の推進」とし、学校経営の責任者である校長の果たすべき役割と指導性を究明しようとする大会であった。

一日目は、十三の分科会で協議が行われた。報告された実践事例で共通キーワードは、「学校と家庭・地域との連携」「カリキュラムの工夫」「教職員の研修・人材育成」が多かった。二日目の全体会では、西村茂会長が挨拶の中で、子どもたちに「自立する力」「共に生きる力」「生き抜いていく力」を育む学校づくりをいかにして進めるかを明らかにしていきたいという大会のねらいを述べた。その後、分科会報告、大会宣言の採択が行われた。

記念講演では、落語家の三代目林家菊丸師匠から、「師弟愛と弟子修業の大切さ」について語っていただいた。大会研究委員長 伊東直人



講師：林家菊丸師匠



種村全連小会長



西村会長



開会行事



小野大会宣言文起草委員長



分科会



伊東大会研究委員長

地区校長会だより

伊賀市小学校長会

「一人ひとりが輝くことを目指して」

伊賀市といえば、「伊賀上野城」「伊賀米」「伊賀牛」等が有名です。勿論郷土が生んだ「俳聖芭蕉」、近年話題の「伊賀忍者」に纏わるものが、有数の観光資源となっています。その伊賀市は、二〇〇四年（平成一六年）に六市町村が合併して誕生しました。合併当時は二七校の小学校がありました。少子化の影響で現在は二二校となり、新たに統合予定の学校もあり、二〇二〇年度には、二〇校を切るという現状です。市内小学校の規模は、児童数五百人を超える中規模校が三校で、多くの学校は普通学級が一年一学級という小規模校となっています。

県内同様に大量退職時代を迎えて、伊賀市でも二～三年で小学校の校長が総替わりするということが繰り返されているのが、「伊賀市校長会活動方針」です。毎年、教育を取り巻く環境や状況が変化するので、具体的な取組は一部修正していくものの、「①伊賀市校長会としての組織力の向上を図り、活



(組織等詳細は広報第四六号の伊賀市中学校長会を参照して下さい。)

動の活性化に努めます。②伊賀市における学校教育の課題解決に積極的に取り組みます。③校長としての力量を高めるため、研鑽に努めます。』を大きな柱にして、先輩方の築かれた方針を受け継ぎ、伊賀市の教育理念「一人ひとりが輝くこと」を尊重し、子どもたちが心豊かで健やかに成長・自立し、共に生きていくことをめざして教育実践に取り組んでいます。実際には中学校長会と共に活動し、定例校長会（年間九回）・四つの研究委員会だけでなく、随時、今日的な教育課題についての意見や情報交換を行い、連携を大切にして伊賀市の教育の充実と発展を目指して、学校運営に取り組んでいます。

員弁郡市中学校長会

進路保障をみんなの手で！

員弁郡市中学校長会（六校）の活動の多くは、小学校長会とともに、員弁郡・いなべ市校長会（全二十三校）として行っています。活動方針は大きく3つの柱「組織の活性化」「授業の活性化」「家庭や地域社会との協働」で構成し、それぞれ具体的な取組を行っています。

「組織の活性化」では、学校経営の活性化や人材育成、更には、校長自らの研究・研修活動の推進を、「授業の活性化」では、人間らしく生きる力を育てる教育の創造を、そして、「家庭や地域社会との協働」では、関係機関や保護者・地域社会との連携・協働を推進し、近い将来のコミュニティ・スクールを視野に入れた研究・研修を進めています。

特に、研究組織としての校長会という性格を大切に、年間を通して研修を行っています。今年度は、①人材育成の推進 ②確かな学力の定着と向上 ③道徳教育の充実 ④豊かな学校生活を築く指導の充実の4分科会を設定し研究・研修を進めるとともに、全体研修として講師を招聘した研修会や先進校視察などを行っています。

一方、中学校長会として、生徒



の進路保障について、全ての生徒の進路を郡市全体で支援する体制をつくっています。それを推進する組織が、進路指導連絡協議会です。年間八回程の会合をもち、郡市内どの学校でも同レベルの進路指導を生徒・保護者に提供できるよう、研究・研修を行っています。地域内の保護者同士の情報交流が、以前に比べ盛んになっていく状況の中で、その役割は大きくなっていくと感じています。

今後、義務教育の役割をしつかりと果たせるよう、みんなで切磋琢磨していきます！

原稿募集

会員の皆様の投稿をお待ちしています。なお、内容・字数等につきましては事務局へお問い合わせ下さい。

●「校長会みえ」について、「意見・ご要望があればお聞かせ下さい。」

三重県小中学校長会
広報委員会

編集後記

三重県小中学校長会広報「みえ」の第50号を発行するにあたり、執筆を依頼させていただいた先生方には、公務が多忙の中、素晴らしい原稿を執筆頂き誠に有り難うございました。心よりお礼申し上げます。

「命に関わる」と言われた怪言や大型台風の影響など、陸など、子どもたちの安全・安心を確保するための取組を迫られながら始まった2学期でしたが、各校長先生方におかれましては、学力向上に向けた取組や新学習指導要領への対応、各学校の独自の課題克服など、ご尽力されていること存じます。

また、10月18日、19日に開催しました東陸連小三重大会を滞りなく開催できましたのも、小学校部会の役員・研究部の皆さんの励みをはじめ、各校長先生方のお力添えの賜であると感じております。さて、今号では、「今日的課題の克服に向けて」や全国大会の報告、各校長会より等、お互いが学びあえる内容を詳しく掲載させて頂きました。

この会報が学校の日々の課題に真摯に向き合い、努力を続けておられる校長先生方の力になれば幸いです。今後ともご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。